京都の民主運動を語る会機関誌

発行所
燎原社
〒606　京都市左京区
東竹屋町・川端東入る
部落問題研究所内
電話　京都761－2141番
振替口座京都 6-15762番
発行人
木村京太郎
頒価　1部 200円(〒共)
年 2,000円(〒共)

十二月八日前後

～四〇年前をかえりみて～

岡谷元治

(1)

四十年前の一九四一年十二月八日、ハワイ真珠湾の奇襲によって、太平洋戦争が勃発した。この戦争は第二次世界大戦の一環であり、中国に侵略し、大東亜共栄圏という幻想を樹立しようとする日本帝国主義とアメリカ帝国主義との戦いであった。

緒戦の半年間に、日本はビルマ、マライ、インドネシア、フイリッピンおよび西太平洋の諸島を占領し、北はアリューシャンから、南はチモール島、東はソロモン群島から西はインド・ビルマ国境にわたる広大な地域を支配することになった。

しかしアメリカは日本の予測より早く、ソロモン群島、ガダルカナル島に反撃を開始し、その後一年半に及ぶ南太平洋上の消耗戦で、日本は海、空戦力の多くを失い、米軍の大規模な追撃戦に対しては、悲惨な玉砕戦をくり返し、特攻隊を以てしても敗勢を挽回できなかった。

愛宕山遠望　石田晶子

(2)

一九四一年十二月八日は月曜日であった。早朝のラジオは、ニュースのトップに軍艦マーチを流し、「大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍は本八日未明太平洋において米英軍と戦闘状態に入った」と放送し、正午前には前近代的な言葉をつらねた天皇の宣戦布告の詔書を読み上げた。

「天祐ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ践メル大日本帝国天皇ハ、昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス、朕茲ニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス。朕ガ陸海将兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ従事シ、朕ガ百僚有司ハ励精職務ヲ奉行シ、朕ガ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ尽シ、億兆国家ノ総力ヲ挙ゲテ征戦ノ目的ヲ達スルニ遺算ナカランコトヲ期セヨ（後略）」と。

この戦争を軍と政府は「大東亜戦争」と呼んだ。これまでに日本帝国主義が中国に武力侵略を開始する契機となった満州事変（柳条溝での鉄道爆破）から十年を経過している。上海事変、芦溝橋事変を経て、中国人民の抵抗と民族解放の意識は次第に熾烈となり、戦線は拡大した。これまで連戦連勝を誇っていた日本軍ではあったが、その占領地は海岸線に近い鉄道沿線の都市を結ぶ「点と線」に限られ、この連絡線も常にゲリラの遊撃に脅かされていた。

(3)

日中戦争では米英は中国の抗戦に同情的ではあったが、対日制裁を回避しながら、日中両国に対し、ほぼ同額の輸出を続けていた。その大部分は勿論軍需品であった。しかし米英による援

（二めん四段へ）

第21回研究例会報告

京都の民主活動家夫人の労苦をねぎらう懇談会

十一月十七日午前十一時から中京区竹屋町の「京都職員会館かもがわ」で、戦前、戦後、京都の民主運動の第一線で活動された方々と労苦を共にされた夫人、婦人活動家を招き中食を共にしながら、かつての苦しみも今は懐しい思いをこめて語りあわれた。午后一時から男性の会員たちを交えて懇談がつづけられた。

話合いには早くから京都の婦人運動で活動された児島とみさん、大道俊さん、婦人運動の研究家井上としさんなどのアドバイスをうけ、和やかに進められた。なお、みなさんたちのお話しを理解し易くするため、時代背景の概要を挿入しながら、聞き書きをまとめました。

昭和前期の世相と婦人活動家たち

第一次世界大戦後の世界デモクラシーの風潮と、戦後の大不況、さらに関東大震災などで、日本の世相は大きく変り、労働運動、農民運動、部落解放運動が盛になり、女性の自覚も高まり婦人の洋装、断髪、ハイヒールなど、旧来の風俗習慣から脱却し、また婦人労働の職場も拡がり、モダンガールの言葉も流行しました。

しかし、三・一五事件などの民主運動の弾圧、さらに満州事変につづく十五年戦争などによって、婦人活動家や夫を牢獄、戦場に奪われた婦人たちは二重、三重の苦しい生き方をさせられました。やがて彼女らは銃後の守りとして戦争の矢面に立たされ、夫を失い、大陸に移住、工場への動員、児童と共に疎開して弾雨をくぐり、原爆を浴びるなど、とくに昭和二〇年八月以後の敗戦直後、女たちの体験は異状な社会の混乱にありました。しかし生きる尊さを知り、人間の尊厳にめざめて女性の社会進出の素地がつくられたのです。

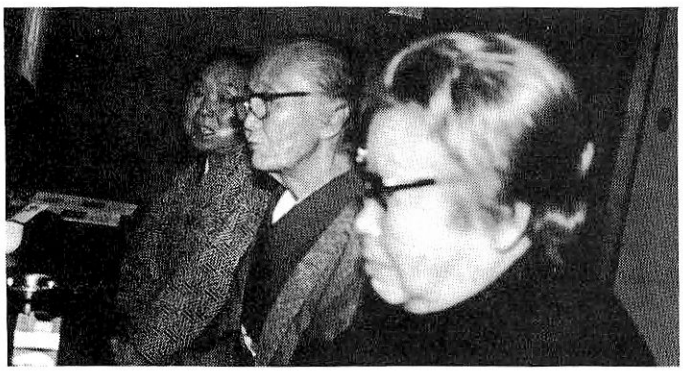
「婦人同盟」活動

斉藤はるお　さん

私も年をとりましたので、人の名前や年代がハッキリしないのですが。

今の『赤旗』の前身、『無産者新聞京都支局』の事務所が左京区の田中にありました。この支局を中心に、浅井花子さん、島崎おこまさん（島崎藤村の姪）、富岡鉄斉の孫にあたる青木さんなど十人足らずで「婦人同盟」という会をもっていました。京都での婦人の組織はこれが最初で、大正十四、五年頃でした。その中で労働者は私一人で二〇歳位だったと思います。

第一番の私たちの仕事は、部落の人達と親密になり、その悩みや願いを聞き、力をかすことでした。オルグの指導があるわけでなし、無我夢中でした。そのために福島コロンペーパーという会社にはいり、友達がたくさんできました。そこの給料は日給で、お天気が悪いと製品が乾かないので給料から引かれる、安い給料の上に差引かれるから、労働者が怒るのもあたりまえです。そこで二三銭の給料をあげてもらうためにストライキをやったんです。



（右より、斉藤はるおさん、谷口そとさん、河田花子さん）

（一めんつづき）

蔣物資の供給ルートを遮断する必要から華南作戦を敢行した日本は、日ソ中立条約締結による安心感もあって、陸軍の伝統的仮想敵国ソ連への進撃計画を放棄し、戦争の長期化に伴う消耗を南方資源確保によってカバーしようとする「北捨南進」論へと方針を転換せざるを得なかった。

他方では日米交渉がアメリカの極東への介入を牽制する目的で続けられておったが、一九四〇年、日独伊三国同盟が調印されたことに刺激されたアメリカは、対日航空機輸出禁止に続いて在米日本資産の凍結、日米通商条約の廃棄、戦略物資の日本向け輸出禁止にまで、経済制裁をエスカレートさせた。英国も、オランダ領東インド諸島もこれに同調したので、日本への輸入物資の八〇%が遮断されることになった。これを日本では日本経済へのA・B・C・D包囲ラインと呼んだ。

とくに東インドからのガソリン輸入が杜絶したことは、戦争遂行に致命的な打撃であった。

(4)

その頃、一九四一年十月、近衛文麿の後をうけて主戦派の東条英機陸軍大将が首相として組閣した。彼は対米接渉を続けつつも開戦準備を進める二面作戦をとった。

しかし交渉は進展せず、十一月二六日アメリカは中国や仏印からの、一切の日本軍の撤退と、蔣介石政府以外の一切の政権の否認を要求する強硬な、ハル・ノートを提示してきたので、日本側は十二月一日の御前会議で開戦を決定したのである。（三めん四段へ）

これが労働婦人運動の初めだったと思います。田中に夜学校があって、そこを根城にたたかいました。婦人同盟の人達も一かたまりになってです。

児島とみさん　「京都の労働婦人運動のはじめは斉藤のおばちゃんに聞かないとわからない。年代や何にかは、京都労働運動史のなかに出ています。」

右より、城ゆきさん、関谷美奈子さん、品角小文さん、中島セキさん、井上としさん

斉藤はるおさん　「その時分、工員の集りで一言、二言しゃべれば警察につれていかれ、取調べも惨忍でした。島崎おこまさんなんかは、他人さんに見せられない箇所を、亀の子タワシでごしごしやられるというようなこともありました。

その時分、評議会ができて、国領五一郎さんなんかが活動されている時であり、前川芳子さんや、北川鉄夫さんなんかが応援に駆けつけ、相談相手になってもらい、当時京都市会議員だった奥村甚之助さんなんかの援助もあってストライキは勝利しました。

そんな活動をしている時でした。谷善さんが、今の主人の斉藤を紹介してくれて、結婚することになったのです。

結婚式の日にも私は五条警察署に引張られていました。式の時間は迫るしいらいらして「これから結婚式やから帰してくれ」といいますと、「今晩式なのかあんたが結婚するのか」と、うるさく念をおし、やっと帰してくれました。五条署から式場へ駆けつけ、着物を着かえる間もなく顔を洗う間もないままに……。

式はたった四人、私と斉藤、仲人の谷善さんご夫妻。そとさんはそれでもなけなしの金をはたいて質屋から呂の紋付を受け出して、谷善さんに持たせてこられたが、それも横においたまま二円五十銭か三円位の料理を前に盃をしました。

それから五十年たっています。

私は信念にしたがって運動をやってきたという誇り。それは誰もようやらなかったことを私はやってきたんだという誇りです。今の若い人たちも運動に誇りを持ってほしいんですよ。」

追放中の夫の留守をまもって

河田花子さん

――河田賢治さんが、一九五二年から五七年までの六年間、マッカーサーによる追放で、地下にもぐっていた時の苦労話――

「河田さん　新聞社の人が来とるで」

私新聞社の人に用ないで。

「何かわるいことしたんちがうか」

私ここえ来てから日も浅いし、悪いことなんか、しとらんで。

「まあ待っとんなるし、小屋まで来てくれんか」

――当時花子さんは夫の留守を守り、母親（賢治さんの）と幼児を抱えて舞鶴で日雇労務者をしておられたー

小屋に行ってみると

「あんた河田花子さんですか」

はい、そうですけど。

「あちらで聞いたり、こっちで聞いたりして、やっと此処の帳場で、あんたを見つけたんや。河田賢治さん、今どこにおられるんや」

知りません。

「知らんと、いうことないやろ」

おらしません、知りません。

「見た言う人あるで……」

八月のお盆に、おばあちゃんをつれて、岩滝のお墓参りをして、晩がた帰えり次の朝出て行ったきりですわ。

「今度は何時帰える言っていた」

知りません。

（二めんよりつづく）

さて、太平洋戦争中の中国戦線は日本軍にとって主戦場ではなく、むしろ軍事的優勢を保ち得た唯一の戦場であった。主戦場である太平洋諸島は烈しいアメリカの攻撃によって、次ぎつぎに奪回された。中国では四川省成都を基地とする在華米空軍は、九州爆撃を始めたが、マリアナ基地の奪還後はそこを中心に東京はじめ日本本土全域への戦略爆撃を加え、主要都市は次々に灰燼に帰していった。

それ以後の日本は戦時経済の破綻、物資不足、海上交通の杜絶によって急速に戦争続行能力を失いつつあった。

すでに一九四三年一一月　米・英・中の首脳がカイロに集って、「カイロ宣言」を発表した。その中で連合軍はソ連の対日戦参加を強く要求し、それは四五年二月のヤルタ協定で、米・英・ソ三国の首脳によって合意された。

八月には広島、長崎へのアメリカ軍による原爆投下と、ソ連の参戦によって日本の敗北は決定的となり、ポツダム宣言の受諾によって、日本は無条件降伏したのである。

さきに一九四〇年九月調印された日独伊三国同盟は、第二次大戦中に実質的協力関係は発生しなかった。イタリヤは四三年にはやくも単独で無条件降伏し、ドイツも日本より三ヶ月早く無条件降伏している。

第二次世界大戦は同盟国対連合国の大戦であるというより、ファシズムと反ファシズムの戦であり、侵略者の野望がもろくも敗れたことを示している。

（完）

それは、うるさいのです。何時の汽車に乗るんだとか、何を持っとるんかとか、手をかえ、品を変えて聞きなるんです。知りませんで押し通してやったんどす。やっと帰えんなったので、仕事にもどったんだけど、皆んなにじろじろ見られて、いやどした。

それからも、とっかけひっかけ服装を変えたり、眼鏡をかけたり、はずしたりして、警察の人や、新聞社の人が来なるんです。その度に大勢の人に顔をじろじろ見られるし、辛ろうて悲しゅうて、なんべん便所にはいって泣いたか知れません。

○

日雇いは四時に仕事が終るので、其の日の賃金をもらい、一里の道を歩いて家に帰えるんです。或る日家に帰ったら、ジープでアメリカさんが来とんなるんですわ。何か主人の書いたものがあるだろうから見せろと言うんです。私、字が読めませんし、何一つ主人の書いたものおいていませんので、こんな狭い家ですし、上がって自分で探しなさい……と言うと何んにも持たずに帰えっていきよりました。

また或る時家に帰えると、おばあちゃんが今日アメリカさん来なって、時間をとらせんから来てくれとのこと、私はあんな所、よう行かんわ、と思いそのままほっといてやりました。

○

また新聞社がやって来て、写真をとって記事を書くと言いなるんです。女房が地下足袋はいて、一里の道を往復して、モッコで土を運んでいる写真を見たら、かくれている河田さんも可愛想や思うて出て来るんとちがうやろか言いなるんです。私は、生きていたら、いつか会えますやろし、いりませんで、と断りました。

○

子供が行っている幼稚園ちかくに、主人により似た人がおんなるんですわ。私もよう似た人やなあと何時もみてたんです。或る日刑事が来て、河田さん帰えってる筈だし会いたいと言いなるんで、そして、舞鶴の駅で河田さんの降りたのを見た言う人がいるで、かくしてもあかんで、と。

私は内の人によう似た人がおんなるしその人と見違いとんなるんとちがいますか。

刑事が帰えったその夜のことでした。私が子供に添い寝している床下で「花子、花子」と呼ぶ声がするんですわ…気のせいかなあーと思ったんですが、やっぱり「花子　花子」と、呼ばれたような気がして、よっぽど床をめくって見ようと思ったんですが、そんな大そうな事、できしませんし、気になりながらまた何時か会えるだろうと思うて、ほっときました。

○

仕事にいっていて休憩になると、皆んなで色々言いなるんですわ。共産党を支持している人達は、金持ちは共産党がけぶたいだろうけれど共産党がいてもらわないとこまるしなあ…

「河田さん、アメリカの方へ行って、青い眼の女とチャラチャラしているのと違うか…　花子さん、あなたも若い相手さがして一緒になったらよいに…」

「河田さん、女つくって、おばあ、おいて逃げたのだろうーよ」

日雇いの仕事は男も女もあらあせん。地下足袋はいて、スコップでの土堀り、手に豆が出来てはつぶれ、タコが出来てきました。

右より、河田賢治さん、児島とみさん、里井のぶさん、向仲小雪さん、その他

六年間仕事の往復は何里あろうとも歩いて通いました。少しでも金をためてと思ったんどす。僅かの賃金の中から、毎日毎日少しずつ、タンスの底にためていったんです。毎晩そっとタンスをあけて計算してたんどす。

そんななかでも、おばあちゃん（河田さんの母）に賢治が留守でろくろく食べさしてもらえへんなんて思わしてはすまんと思い、闇米買うて、食べさしましたし、餅の好きなおばあちゃんの為にお正月には一斗の餅をつきました。

○

主人が帰えるいう知らせのあった日でした。其の日は、日雇いに行っていても時間が長ごうて長ごうてかなわんなあと思いました。

まわりの人は「河田さん、六年も行ってはったんだから、千両箱持って帰ってきやはるで、今晩は千両箱枕に寝られるで……」なんて言いなるんです。

その主人は着のみ着のまま、一文なしで帰えって来てるんです。そして最初の言葉が、「お前さん、金もってるかい、少し出してくれ……」でした。

○

しかし、皆様のお力で議員に当選させていただき、東京での十八年間は、奥様でくらさしてもらい有難いと思っています。

斉藤はるおさん。

「花子さん、言いたいこと言ってスッとしたのと違うか。今晩だまって聞いてはった河田さんに、お酒一本ふやしてあげてや」

品角小雪さん

「修学院の今の家は、花子さんが河田さんの留守を守りながら、必死でためられたお金で、土地も買い家も建ったのです。

今は若い子供夫婦と四人の孫にかこまれた仕合せなお二人です。」

外地から引揚げて

――一九四五年（昭和二〇年）一〇月七日、引揚げ第一船「雲仙丸」が朝鮮釜山から舞鶴に入港し、外地で終戦を迎えた同胞が、故国の土をふむまで、何十回にも亘る引揚げ作業と数々の苦労が重ねられました。敗戦当時外地在留の京都出身者は軍人軍属は約七万五千名、一般民間人は約六万名で、計十三万五千名で、中島セキさんもそのおひとりです。

中島セキ　さん

「夫の戦死後、主人が満鉄にいました関係で、残された子供二人と両親と共に引揚げてきました。やっとの思いでたどりついた本土でしたが、住む所も食べるものもない生活苦が待ちかまえていました。

どん底に落された者として、自分の力をためすのはこれからだと思い、むしろ幸わせだとも思いました。

同じ立場におかれた引揚婦人たちが力をよせあい、ともに生きぬくために生れたのが引揚者婦人連盟でした。

会長に真壁二葉、副会長に私（中島セキ）と真鍋秋子が選ばれて事務所を顕道会館（下京区花屋町六角）におき運動をはじめました。二〇畳二部屋に、三〇世帯の城でした。

生活物資の確保、寝る所の心配からはじまりました。最初に目をつけたのが、御所のあの広い庭でした。あの広い場所に引揚者の、組立の住宅でよい、建ててくれと、厚生省、宮内庁、GHQとかけあいにまいりました。なけなしの中から旅費を工面してくれた仲間のことを思うと、どうにかしての思いで一杯でした。しかし気違い扱いされて帰ってきました。

それから府庁や、GHQと日参してかけあいを初めて千本鞍馬口にあった千本会館に十七台の動力ミシンをおいていただいて授産所をはじめました。

子供の手を引いて引揚げてきた未亡人の方々が寮がほしいという願いがみのって、吉田山母子寮が出来、寮母として真鍋さんが就任したのですが、給料が払えない為に、府の方に移管して面倒をみてもらうことになりました。

男みたいに動いていても婦人は婦人ですね。歩くこともつかれてしまうと電車やバスの唯乗りもしました。先の人が払っている間に前で、といって降りて行くのです。

つかれて道端にしゃがんで、トラックの来るのを待っていて手を挙げるとおばさんどこまで行くんや…といって乗せてくれたものです。今はこうした人情はありませんけどね…

引揚げてきた者は着ることも着せることも大変でした。軍の放出の毛布の真中に穴をあけて首を通して、下は素っ裸、寒い冬中、想像も出来ない状態でした。

蜷川さんが知事に出られ寮に来ていただいてこの様な状態を見ていただきました。

蜷川さんは、いつまでもここに居てもらおうとは思っていない、いずれちゃんとした所をと思っているし、新しい家も作ってと考えていると約束していただきました。

其の後高野の旧陸軍病院跡が引揚者の寮となり三〇〇世帯が入寮できましたし、府の方でも内職会のために百万円の経費が予算化されました。

現在では引揚者の為の内職あっせんが、一般住民のものとなり、市内行政区毎に内職会が出来、連合組織となっています。

戦後の世相と婦人たち

戦後の日本の国民は、敗戦で呆然自失して、不安にかられながらも、再び立ちかえった平和に、落着きと安らぎを覚える複雑な心理状態にいました。

占領軍がその初期に断行した「日本民主化」の方策は、それなりに進歩的なもので、とりわけ婦人の解放の上で大きく、成果をあげました。

しかしながら昭和二五年に朝鮮戦争が勃発してから占領政策が大きく変わり、日本再軍備体制を促進する方向に進み、警察予備隊の設置、戦犯の「大物」が続々とかえりざいて政治の面で活躍するといった、逆コースの状況が急速にすすみました。

朝鮮戦争による特需ブームで復興した日本の独占資本は、アメリカに従属しながらも、独自な経済要求、政治要求をもって日本の労働運動、民主運動に抑圧を加えてきました。

露骨な反動政策がうちだされる中で国民は悲惨な体験をよびさまし、とりわけ婦人達は生活の場を奪われるのに抵抗して、平和に対して機敏に反応し、すわり込みを続けた内灘の主婦たちのたたかい、原水爆禁止の署名に立ちあがった全国各地の主婦たちの活動は、日本の大衆的民主闘争をよみがえらせ更に根づかせる大きな役割を果しました。

谷口そと　さん（谷善夫人）

「苦しみも、悲しみも、遠い思い出、片方が亡くなっている今、何にも云いたくありません。冥土を悲しませる事も出来ませんから。」

里井のぶ　さん（陸郎氏夫人）

「古い人達のお話しを聞いていまして多少場違いのような気がしています。

私は初め主人が色々運動をしていますのを地域で助けていたような者です。二十歳で結婚し、四人の子供を抱えて貧乏と闘いました。内職で夜通し編物をしたこともありましたし、食料難で子供達に食べさせるのに苦労しました。そんな中から子供を守る事の大切さやPTA活動で教師と母と地域のつながりの大事さを学んでいきました。」

×

会の終了後、そっとみせていただいた、欄間用木彫のみごとさ、御夫君の没後、ぼつぼつ習いはじめましたとおっしゃる芸能心豊かな作品をみせられて、ふと、お能に堪能であった陸郎先生を思い、お家に特設されたお能舞台を思い馥郁として残る御夫妻の人間的な豊かさを感じさせられました。

（文責　品角小文）

（追記）

このあと、午後一時すぎから男性会員を交えて懇談会に入り、京都の婦人運動の活動についての体験談が出されました。

大道俊さん

「私は戦前大阪を中心にして、戦後は京都と東京で活動しました。

昭和五年京都の三高がストライキに立ち、同六年には京大のストライキが起りました。京大には社研があり、京都女専にも活動家がいました。田代文久と結婚した小泊れつさん、山田六左衛門の妻になった宇治の上林ユキさん、それに共産青年同盟の横地昭子さん、栗原祐と結婚した足立あやさんなど、これらの人びとは党活動家のハウスキーパーとなり、またオルグとして大阪へも出かけました。

当時の支配階級は、赤いイバラだとか、男をわたり歩く女だとか、悪宣伝をしたが、それにもめげず闘いました。男尊女卑の世の中で婦人の権利を主張し、職場での搾取と差別に反対しての闘いでした。

京大の河上肇先生をはじめ、同志社の若い教授や学生が、労働者に強い影響を与えました。私は、八月二六日と九月一八日の一斉検挙にあい、共産青年同盟の横地昭子さん、城ゆきさんたちと共に投獄されました。」

児島とみさん

「戦前の私たちの運動は、大正デモクラシーの影響をうけ、女子が男子にくらべて賃金その他で差別されていたので、それに反対しました。河上肇先生の『第二貧乏物語』や、中央公論などの進歩的な雑誌の論文に影響され、選挙権がなかった女として私たちは不満を組織して闘いました。」

岡谷元治氏

「私は同志社におりましたが、戦前の活動家には地主の息子もおり、理論を勉強して哲学者になり悩んでいました。

真下信一、林要、住谷悦治先生などの教育をうけ、古代哲学や唯物論など勉強しました。出町のおでん屋に入っても、店の主人が「搾取」ということを知っているかと、議論をふっかけるのでした。

消費組合運動は、キリスト教社会主義者の賀川豊彦などが指導し、栗原の細君の足立あや、田中無産診療所では広田、梅本、滝川くにえなどが勤め活動していました。府立病院のストライキも闘われました。

昭和恐慌の中で、学生生活が苦しく社会意識が高まりました。英国炭坑労働者のストライキに呼応し、学連事件が起り、淡徳三郎や、栗原祐などが中心になって闘いました。インテリと労働者の連帯があったのです。」

木村京太郎氏―「戦後「婦人民生クラブ」ができ、さいきんは「新婦人の会」の方々が活動されていますが、その経過を話して下さい。

児島とみさん―『婦人民主クラブ』の結成は昭和二一年一一月ですが、京都では昭和二五年につくられ、参議員議員選挙に、全国区で櫛田フキさん、地方区の京都で大山郁夫さんが立候補されたとき、私は当時役員でなかったがみんなと共に応援しました。」

大道俊さん―「櫛田フキさんは、京都今出川大宮上ったところで織屋をしていたおじさんがいてそこを事務所として参議員選挙をやりました。私は当時北野仁和で生活を守る会をつくり、『婦民新聞』を二〇〇部ふやしました。はじめ『婦民』はプチブル婦人の組織だと反対もあったが、結局みんなでがんばりました。

東京では農林省の青木らによって分裂させられたが、京都では細野さんや山田さんらが『婦民』を残すよう努力されました。それから『平和婦人新聞』も入れたし『新女性』という雑誌もくばりました。

「新婦人」は、それからあとにできたが『婦民』とは別の組織です。」

岡谷元治氏―「「婦民」は東京で中国文化革命や新左翼の運動に影響されて分れました。京都は、細野、西山、本庄夫人、私の家内などがやっていました。いまも「新婦人」の会で活動的な人です。」

このあと、話は発展して「治安維持法ギセイ者国家賠償請求」運動や、旧友クラブの話などが出たが、それぞれが相当の役割をもっているからその活動が期待される意見や、発言がありました。

この外に、大阪吹田の城ユキさん、京都の向中小雪さんなど、戦前、戦後の活動家も参加されていたが、早退や歯痛などのため、お話を聞けなかったが自民党政府の軍拡、福祉切捨て、行革、などに対する反対など、お互いに元気で闘うことを約束して散会しました。

（編集部U生）

第22回例会（予告）

本年最後の定例研究会を左記の通りひらきます。年末多忙の折柄、くり合わせ多数御出席下さい。

一、とき　十二月十二日午后一時半より
一、ところ　中京区竹屋町河原町東入　京都職員会館「かもがわ」
一、テーマ　私の経験した戦前、戦中の天皇制下の教育
一、ゲスト　元京都小中学校教員　岡崎芳三氏
一、参加費　一名につき五〇〇円也　（茶菓代共）

一九八二年度総会（予告）

一、とき　一月一六日午后一時より
一、ところ　立本寺（上京区北野一丁
一、内容　(1)八一年度事業と会計報告　(2)新年度事業について　(3)新しい役員の選出　(4)食事を共にしながらの懇談
一、参加費　一名　二、〇〇〇円（食費共）

京都の民主運動史を語る会

父、兼光の思い出 (五)

細迫朝夫

(1)

「由来、血に燃ゆる若い全生命を打ち込んで悔いない事業は、人類発展の為めに意義ある建設的事業にある。

諸君はソヴエット・ロシアの青年を、明治初代の青年を羨ましくは思わないか。彼等の前には誠に洋々たる大海の如き前途が開けている。」

「斯る羨むにたる途は、われらの前には発見できないのであろうか。否、労働者、農民はいまやその光輝ある途を進軍しつつあるのだ。」

「彼等のそうせずにはいられない故に進むその路は、正に人類発展の為めに最も有意義な建設的事業であるのだ。

宇治の『山宣』の遺骨の上には

『好むにせよ
　好まざるにせよ
やがては来る
　その日の為めに』

と彼の述懐が掲げてある。」

『早稲田大学新聞』(一九二九年春)への「全生命を打ち込み得る途へ」と題する父兼光の寄稿からの引用である。

おそらく、卒業后の進路決定へのアドバイスをという求めに応じたものであろう。その結びのなかで、労働者農民の事業の中へ「生命を投げ込もうではないか」と訴えている。

この思想態度は、生涯を生き生きと貫いていたように私には思われる。

(2)

この労働者、農民の主体的な解放事業を指導しうるのは、共産党以外にありえないことも固い信念となっていた。前述の予審調書などにおいても、その点はいささかも崩していない。

獄中の市川正一が粗しい飯をねりつぶして口にしながら、革命のため一日も永く働らこうといかにきびしい努力を続けたか、など私に語りきかせた。また、野坂さんの帰国直后の演説をひいて、内容、表現ともに、それがいかに模範的なものであるか、稱えてやまなかった。そのときどきの父の感動にみちた表情をいまも鮮やかに想い浮べる。

同時に、父はその解放事業のための戦線における自らの位置づけについてきわめて自覚的であったように思われる。自らの活動の場を合法的側面に求めていた点にそれはうかがうことができよう。それが主義としての合法左翼の立場でないことはいうまでもない。山川主義との闘いの実践がそれを証して余りある。

しかし、この点に父の限界があったことも確かである。それは、ポジティブにもまたネガティブにはたらいたように思われる。

(3)

それがもっともポジティブにはたらいたのは、労働農民党書記長の時期ではなかったかと思う。

周知のように、一九二六年三月結党された労働農民党ははじめ評議会など三団体を排除していたが、地方支部を中心に三団体排斥反対、門戸開放の主張が強まり、十月の第四回中央執行委員会において総同盟などの右派、さらに中間派まで脱退し、三輪寿荘も書記長を辞任するに至り、唯一残った日本農民組合に推されて父は書記長に就任した。

これまた周知のことだが、このとしの暮、共産党は再建されたが、福本主義に支配され、党の「大衆化」は、その思想的、組織的独立性とともに正しい認識をえなかった。

しかし、小作争議の度重なる経験から政治的闘争の必要性の自覚、さらに労農同盟の思想、それらは急速に拡大していった。戦闘的な労働運動との合流。その高潮、正に画期的な時期となった。そのエネルギーに支えられそれを集中したのが労働農民党であった。

共産党は、労働農民党書記局フラクションを通じて指導した。書記長としての父は、共産党と大衆党との接点に位置したのである。

父はのちのちまで、この書記局で活躍した非転向のひとたちに、同志としての厚い信頼を寄せていた。いまも御健在の杉本文雄さん、すでになくなった清家としさんなど。清家さんの『伝説の時代』出版記念会に病に臥して上京できなかったことを残念がっていた。他方、転向したひとについては、父の口から一度も聞いたことがない。

(4)

一九二七年秋、最初の「普選」として府県会議員選挙がおこなわれた。労働農民党は全国で十万をこえる得票を獲得、他の無産政党を大きくぬきんでて注目と希望を独占した。

「政治的自由獲得」、ブルジョア・デモクラシー実現を当面の目標とした党の選挙総括は、当然のことながら、「普選」の法規自体としての活動の圧迫、法規解釈による圧迫、治安警察法利用による圧迫と具体的事実を列挙して問題を暴露している。

書記長として寄稿した雑誌論稿のなかで、「ある支部では二十一回の演説会に、注意六十四回、中止四十七回、解散一回、検束二回…。言、一度対支問題にふれ、或は金融恐慌問題にふれれば直ちに中止が見舞はされた。」(傍点―筆者)などと暴露し、次の言葉で結んでいる。

「見よ、広汎なる大衆の間より『労働農民党の旗の下に！　我等に選挙の自由を与えよ！　我等に言論集会結社印刷著作の自由を与えよ！　十八才以上の男女に選挙権を与へよ！」の声はホーハイとして巻き起りつつあるではないか。我等はさらに倍旧の勇をふるって、全被圧迫民衆の要望を担って政治的自由獲得のさらに執拗果敢なる闘争へ進軍するであろう。」

翌春の衆議院総選挙がさらにきびしい圧迫、とくに大山委員長の立候補地香川での空前の大弾圧をうけたことはよく知られている。

「全生命を打ち込んだ」姿をこれらの闘いに私はほうふつする。だが、難しい問題とつぎつぎに直面することになる。

(つづく)

フィリピン

ネグロス野戦病院記 (2)

―語りつぐ戦争体験～

医療法人岡谷会理事長　岡谷　実

死の行進（つづき）

出発に先立って、私たちは残留を選ぶか、移動を選ぶかを再度患者に確かめるのだった。こうした場合、指示によって残留か移動かを決定すべきなのであろう。それが軍隊の規律であった。だが、部隊長である病院長をはじめ私たち軍医に、どうして患者の運命を左右する決定を下すことができよう。その結果、残留を決意した五十名程を除く患者全員が、病院部隊と行動を共にすることを自ら選んだ。しかもその大部分の者はジャングル内の困難な行軍に到底耐える身体の状態ではなかった。ただひたすらに生き残るための手掛りを見失いたくない一念からの最後の選択であったに違いない。

指令されている目的地点は、地図の上では直線距離にして僅か二キロ位いの奥地にすぎなかったが、数次のジャングル移動にその行路の困難を知悉している私たちは〝死の行進〟という忌わしい言葉を、息苦しく胸奥で嚙みしめるのだった。もし、私たちに残された一縷の望みがあるとすれば、五月下旬頃から六月の初めにかけて、米軍の砲撃がピタリと杜絶えていることだった。ネグロス島での戦いは終熄に近づいている。漠然としたそんな予感であった。追いつめられた戦場での極限状況のなかにも生きつながる微かな希望はどんな場合にも残されているのであった。

さして急坂ではなかったが、奥地への道は登りに向っていた。樹海の底を這う瘤のような木の根、雑草の生い茂る難路を辿りながら、四百五十名余の傷病兵を率いた病院移動の隊列は進むそれは隊列というよりは、彷徨者の群にも似た敗残の姿であった。それでも移動を開始したときは、隊列らしい行進の連なりはそれなりに見られた。間もなく、隊伍を離れ、道端の草に坐り込む患者の姿が増え、行軍はいちじるしく乱れを見せ始めた。「遅れるなよ！」の声をかける衛生兵や、比較的元気な傷病兵仲間に、「先に行け、休んで後から行く」と、弱々しく手を振って先行することを促すのであった。

残留を決意した患者の場合は、残留することが死を意味することを覚悟して残った。移動を選んだ患者の場合もジャングル内の強行軍が〝死の行進〟を意味することをよく知っていた。ただ違うことは目的地までなんとか辿り着くことができれば――という、断ち難い生への執着と希望にすべてを賭けていたことであった。

病院移動の行軍に三日間を掛け、目的地に辿り着いた患者は僅か五十名足らずに終った。（旅団司令部の指令目的は完全に遂行されたというべきだろうか……。私はこの冷血非道の指令に戦争と軍隊の窮極の姿を見届けた生き証人でなければならない。」

マンダラガンの地獄絵

直線距離にして二キロ、徒歩距離にして約七キロ。三日間の病院移動の結果は、四百名近くの患者の生命が失われたことなのであった。私は、その三日の行軍の間、行進の前後を幾度となく往来した。体力の衰えに苦しかったが他の者に比べてまだしも元気であったこと、ただ気力だけで踏んばっていたのだと思う。蹌踉と後方から遅れてくる患者を激励し、また路傍に倒れ水を求める患者に駆けよって、水筒の水を与えることも幾度かあった。すでに意識を半ば失い、水筒を摑む力すらない患者の傍らに水筒を置いて、坂を後方に下り、再びその場所にとって返したが患者はすでに亡く、虚ろに開いた眼窩や口から蛆虫が這い出すという光景も目のあたり見た。

その三日間、病院移動の行進が通過した道に沿って、歩き、這い、飢え、疲れ果て、倒れた傷病兵が、もがき、苦しみ四百名近くも亡くなっていったのであった。

目的地である新しい病院設営地に到着した翌日、私たちは落伍者の生存者を確かめるべく、移動の道順を逆に辿っていった。そして、この世の姿とは信じられない地獄を見た。死屍累々と横たわる光景に行き当ると、強烈な死臭が鼻を衝き、死体という死体には蛆虫が群がり寄ってうごめいているのだった。さらに道を進むと、白骨を露わにしはじめた死骸の間から、溢れ出るようにふくれ上った蛆の大群が、道いっぱいを覆いつくし蠢動する凄まじい光景にぶつかり、慄然とするのだった。

まるで死の行進の三日間の推移を物語るような凄惨な地獄絵を眼前にして私たちはただ凝然と立ちつくすだけであった。

白旗を掲げて山を降る

その後のネグロス野戦病院は暗澹たるものであった。想像を絶する悲惨な犠牲を払って決行した病院移動も、もはや組織的な戦闘能力を失った旅団のもとでは、無用に近い存在になりつつあった。死の行進を乗り超えて生き残った傷病兵たちも、燃えつきた炎のように次ぎ次ぎと息を引きとっていくのだった。軍医も衛生兵も、すべての者が飢えと疲労と名状しがたい崩壊感覚に打ちのめされていた。

私はひそかに決意していたことを、決行するときがきたと悟った。いたづらに時期を遷延することは、当てもなく自滅の日を待つことでしかない。そう心に決めた。私はためらうこともなく、部隊長にその決意を打明けるのだった。米軍の攻撃が最も激烈だった五月の半ば頃、私より年下のこの病院長とは戦局について語り合ったことがあった。

私が絶望的な戦局の状態に触れると若い病院長の口から「こんな状況になると、これしかないですな……」と、両手をさっと挙げたことが強く印象に残っていた。その時は、それ以上のことをお互いに語ることもなかったが、いざという時に私の計画を話すことの

できる仲間を得た思いを胸に納めていた。

私の集団降伏の計画を、若い部隊長はよく理解してくれた。そして、「それしかないでしょう」とぽつり答えた。

「……いづれは、降伏することになるだろうと思うが、部隊の中には降伏に強く反対する者も多いことだろう。すべて岡谷軍医の意志と判断で工作を進め、部隊から離脱していくことだ。後に残る者については自分が連れて旅団本部に撤退することにしよう……」

それは私の投降計画にたいする、心強い協力であり、援護策にほかならなかった。「また逢うことになるでしょう。」話が終ると若い病院長は、そうつけ加えて言った。――（後日、この言葉通り、レイテの捕虜収容所で再会を喜びあった）ネグロス野戦病院は、事実上、この日を最後に消滅するのであった。

その日のうちに、私は部下や患者にたいする説得工作を進めた。

「戦況は絶望的である。日本軍の勝利は望めない。恐らく日本軍は降伏以外に無いが、その時期は我々には判らない。その日まで生命を支えること自体が困難な状態になってきている。しかし、いま我々が置かれている苦難が明日になれば解き放されるという条件は何一つない。無為に死を待つよりも私は残りの五十パーセントの可能性に賭けて山を下り、米軍に降伏するつもりだ……。強制はしない。私と行動を共にするものは来て欲しい。」そう説得するのであった。だが説得工作は容易なことではなかった。私の判断で相手を選び、投降の計画を一人ひとりに語りかけるのであったが、時には思いがけぬ抵抗に出会うこともあった。確かな反応を示して、行動を共にすることを誓ったのは部下の五名程でしかなかった。

翌未明、私は指示した集合場所に向った。まだ明けやらぬジャングルの暗闇の中に、私を待つ意外に多い人影を見て、私は工作が決して無駄に終らなかったことを知るのだった。最終的に投降に加わったのは三〇名であった。その中には強く投降を拒んでいた患者の中の兵や将校まで加っていた。

「二人を一組にして、絶対離れないこと。山麓の米軍前線に到着した時点で、米軍陣地から遮蔽した地点に集結する。降伏の手順についてはすべて私に一任すること。これからの行動の指揮は私がとる。」と、下山に当っての注意を与えた後、私の率いる投降の一団は、朝まだき薄明の道を辿って山を下った。

七月一日、その日は奇しくも私が前年に召集された日と同じ日であった、マンダランガン山の転戦に疲れ果て、痩せ衰えた三十一名は、背丈を超える雑草や、熱帯樹の繁茂するジャングルの下り道を、間隔を置いて降りた。数ケ月前、長期抗戦に備えてマンダラガン山の野戦病院が発足した頃雑草を拓き樹木を伐採して、日本軍の手で開かれた道であった。そうした感慨に耽る余裕すらなく、下山組の患者と衛生兵たちは、斜面を滑り、木の根に転倒しながら、懸命に山を下るのだった。私たちが最も警戒しなければならなかったのは、米兵に発見されることではなく、むしろ日本軍の敗残兵に発見されることであった。頑くなに戦陣訓を守り、それを強制する戦闘部隊の将校や下士官に発見された場合即座に銃殺の浮き目を見なければならないからであった。日本軍隊の愚かしくも悲しい習俗に私たちは最後まで脅かされたのであった。

下山二日目、投降隊の一名が行方不明になった。確かめると、二人組の一人が眼を離した僅かな隙に、山の斜面をよろめき歩くように転落していったまゝ姿を見失ったというのである。私たちは半日近くをかけて探索したが遂に見当らず断念した。それは投降に反対していたなかの患者の一人で、淮尉であった。

三日目の午後、ようやく私たちは敵前に接近することができた。私を先頭に白旗を掲げて米軍フイリピン部隊のキャンプに向った。三十一名の投降者を警戒する色もなく、フイリピン兵は迎え入れた。その夜監視に当ったフイリピン兵から食物を与えられた私たちは、久しぶりに口にする食べ物らしい食べ物と監視兵の陽気な歌声の饗応にあずかるのだった。私は悪夢のようなこの三ケ月間の出来事を、脈絡もなく思い浮かべながら、夜半から降り出した激しい驟雨の音と、抑えることのできぬ心の昂ぶりに、テントの一夜をまんじりともせず明かすのだった。

◆　◆　◆

翌七月四日、米兵に引き渡され、パコロド刑務所に一時収容された私たちは、間もなく飛行機でレイテ島のタクロバン捕虜収容所に移され、そこで終戦の日を迎えた。

（了）

◆巷の声◆

行革と差別

橋本孝二

行財政改革とやらで「臨調答申」という憲法を無視した意見が押出されてきた。

国の財政が苦しいから国民の皆様にも御協力を願って「赤字を少しでも少くしたい」と色々ならべたてる。だが一寸待って下さい。そもそも何でこんなに赤字になったんだろう。御金持が儲ける事業のために国債を沢山出したのはどこの政府だったか。行政改革は『天の声』だと押しつけているが、公務員を減らすと言っても、公用車で送り迎えされる高級官吏や、赤坂あたりへご出張の役人の数を少くせない。安上りの行政を進めるために国でやってる事業を民間に移せという。民間下請けの労働者は賃金も安く、労働条件も悪い、街のゴミ収集の下請労働者は、月々の給料でも現業公務員の半分位で公務員が有給休暇で夏休みに山や海へと出かけるのを見て一日か二日の夏休みを会社に申出たら「休んでもよいが給料は出せないよ」といわれた。

末端で市民生活を一生懸命保障している労働者は、人並みの楽しさを許されない差別労働者なのだ。

その実情を百も承知の上で、国が行革という大義名分で、差別を助長することに本当に腹が立つ、そんな安上りが好きならば、大臣の外は全部下請けにしろと、落語めいたことを云いたくなってくる。

（『東京部落研会報』第一一三号より要旨転載）

山田幸次さんの「水産時代」と私

船山信一

(1)

私は『燎原』第二〇号で山田幸次さんの御逝去を知ってビックリしました。一言でいいますと、私は山田さんの「水産時代」の同僚なのです。

私は唯物研究会やプロレタリヤ科学同盟の仕事のために検挙され、いったんは起訴保留で釈放されたが『改造』昭和一〇年五月号に「現在における日本主義の理論特質」という論文を発表したために保留を取り消されて市ケ谷刑務所に送られ、昭和一〇年四月に、「懲役二年、執行猶予五年」という判決をうけて釈放された。

私は京大の哲学科を出たのであるが執行猶予の私にはもちろん教職その他のまともな職場は与えられなかった。ところが昭和一二年の秋に、作家の野村愛正先生から大日本水産会（略称「大水」）というところで、農村向の、『家の光』のような『漁村』という漁村向の大衆雑誌を出すに当り、その編集者を推せんしてくれと頼まれたが、君やってみないかというお話をうけ、農村（農家）出身であり、大学で哲学を学んだ私は、漁村のことは何も知らなかったが、雑誌編集のことは『唯物論研究』の経験もあるからと承諾し、私が「大水」の職員として『漁村』の初代編集員になることになった。

ところが「大水」の会長であった伊谷以知二郎氏（彼は当時日本の水産界の大御所であった）は「大水」は皇族を総裁にいただいている団体である（当時の総裁は伏見宮であった）から、思想犯の執行猶予者である青年を自分のところで発行する大衆雑誌の編集者にはできない）ということで私の「大水」就職はだめになった。

その後、伊谷翁は間もなく死去され野村きんのところに「大水」から再び連絡があって「『漁村』の編集は、船山君の代りに雇った青年一人では無理なようだから、もう一人ほしい。新しい会長（三井米松氏）は思想犯で執行猶予の経歴の者でも差支えないから船山君を『漁村』編集の補助者としてまわしてほしい」という連絡があって、私は昭和一二年六月に「大水」に就職することになった。

(2)

「大水」の常務理事の木下辰雄という人は、後に全国漁業協同組合→全国漁業協同組合連合会（全漁連）の指導者となり、太っ腹な男で、木下さん自身は執行猶予の思想犯でも職員として差支えないと考えていたのであった。

ところが、私が『漁村』の編集者としてだめになったあと代りに『漁村』の編集者になったのが山田幸次さんであるということと、そして山田さんは私より六年後、つまり昭和一一年に京大のフランス文学科を卒業した青年であることを知ったのはもちろん私が、「大水」に就職してからのことである。

私は山田さんがどういう経過で「大水」に就職したかは、当時だけでなく、今に至るまで特別にききもせず、きかせられもしないでしまった。

私が「大水」に就職すると三ケ月ほどして「支那事変」が勃発したのであるが山田さんと相談して、その解説をすでに支那問題研究者として論壇に登場していた尾崎秀実氏にお願いしたりした。

そして私が「大水」に就職したときには鈴木善幸さん（現首相）が「大水」の若手職員で水産講習所（今の水産大学）出身のリーダーとして活動していた。私はもちろん、山田さんも水産については素人であったから、水産の技術的なことについては善幸さんにきき、また指示を仰いだが『漁村』の編集のことはほとんど自分たちでやり、鈴木さんは『伊谷以知二郎伝』（昭和十四年発行）の執筆に当り、また木下常務の政治秘書のような仕事をしていた。とくに木下常務のライバルであった小石季一氏を新設されるべき全国漁業協同組合協会の指導部門から排除することを画策し、それが成功して、木下氏が全国漁業協同組合協会の常務理事、さらに全国漁業組合連合会、中央水産会の専務理事にもなり、鈴木善幸さん及びその一党も木下氏に従い、『漁村』とともにその方に移った。私は「大水」に残り、昭和十九年に仙台に移るまで『水産界』という会報その他の編集をやることになった。

(3)

こうして、私が山田さんと同一団体にいたのは、僅か三、四ケ月にすぎなかったが、水産の諸団体はすべて水産講習所出身者が指導する友誼団体であったから、私と山田さんとの連絡も切れなかった。

私は渋沢啓三氏のアチック・ミューゼアムにつとめておられた民俗学者の宮本常一さんたちと共に漁村研究会をもっていたが、山田さんもそれに参加して下さった。さらに私が今のべたように、水産界はいわば「水講閥」が支配していたから、京大出身者の力などはまことに微々たるものであった。当時の水産界に京大出身者として勤務していたものは、水産講習所→京大経済学部の出身者であり、当時京大経済学部の助教授をしておられた蟹川虎三先生の弟子であり、当時の水産講習所の助教授をしておられた岡本清造氏、同じく蟹川先生の弟子で、当時水産社という水産図書および水産雑誌の発行所の仕事をしておられた宮城雄太郎氏、京大農学部の出身者で、当時気流水産会の中央機関であった「帝国水産会」の技師をしておられた津田雄一君、それから山田さん、及び私、さらに私よりも後に水産界に入り、全国漁業協同組合協会→全漁連の仕事に当られた農学部出身の本多英男君であった。この五人が京大出身者としての友誼からまた「水講閥」に対するウップンをはらすために『狂水会（京水会）』と称して時々会合した。

(4)

山田さんは全国漁業協同組合協会→全漁連に移られてからは、『漁村』の編集にもたずさわっておられたが、それをとくに片柳左右吉君などに任せ、とくに漁村青年の指導に当られ、農村の産業組合青年連盟（産青連）に当る

漁業組合青年連盟（漁青連）の結成及び指導に当られ、そういう仕事を鈴木善幸さんともいっしょにやられたが、しかし、また鈴木さんと対立することもあったであろう。山田さんが後に農青連に移られたが、こういう事情及び農青連の指導者であり、山田さんが尊敬しておられた柴田和夫氏との関係によってであろう。（柴田氏は私よりも一年後の京大哲学科出身であるが、昭和二〇年八月六日にちょうど広島に出張しておられて爆死された。）

私が山田さんについて特に想い起こされるのは、山田さんが召集されて東京駅に見送りに行ってわかれる際、山田さんが「僕はきっと生きてかえって来る」と力強く断言されたことである。山田さんはその約束通り生還されたがしかし、山田さんが農産連に移られたのは、それから間もなくのことである。私は昭和一九年までは、東京で「大水」の仕事をしていたが、六月からは中央水産業会仙台支所に移り、敗戦後も水産からはなれず、昭和三〇年三月まで、宮城県水産業会→宮城県漁業協同組合連合会の仕事をしていた。

(5)

私は昭和三〇年四月から、京大卒業後始めて立命館大学で教職についてからも、昭和四〇（一九六五）年一一月に「中国訪問京都学術代表団」の一員として中国訪問の際、歓送会、及び報告会においてお話する機会があった以外は、山田さんが忙しかったことが主原因で、御あいさつの機会がなかった。

山田さんは『燎原』第七号に発表された「鈴木善幸氏と雑誌『漁村』」のなかで、水産時代のこと、及び私のことにも言及しておられるのであるが、それを五年前に立命をやめてから横浜に住んでいる私が、昨秋京都に行ったときに住谷悦治先生宅で見せていただいてなつかしく思い、山田さんに電話したがお目にかかることができなかった。

それから一年たって、山田さんが亡くなられ、私は山田さんにもうお目にかかれず、つまり四〇年間お目にかかれなかったことになってしまったのである。

「狂水会」のメンバーも、岡本、宮城の両兄、それに山田さんまで亡くなってしまって、まことにさびしいことになってしまった。

私はここで『燎原』誌上をお借りして山田さんにかんする想い出、及び山田さんへの訣別をのべさせていただいたのであるが、山田さんの「水産時代」のことを余り知らない方がたにも、面影の一片を知っていただければ、幸いであると思う。（一九八一、二、二四）

旧縁の会

（救援会）より

東京　俣野　旭

去る一一月二二日の秋季例会には、阪出、金沢、西宮、小樽からも出席、地もと神奈川、埼玉、東京都の主な人たちが四三名集り盛会でした。その際、「燎原」誌を配布し、千葉県船橋市の村本賢治市から毎号配布の依頼をうけ、他にも直接申込があると思います。

第一九号に、井垣氏の追悼記を転載して頂いたので、奥さんと娘さんから喜びの御礼状を頂きました。（以下略）

（三鷹市上連雀六ノ九ノ七ノ二）

随筆

戦争と領土

斉藤雷太郎

○

日本に併合された朝鮮、被侵略民族の屈辱感と悲哀を痛い程味った朝鮮人は、祖国独立のために立ち上った。伊藤博文はハルピンの駅で、独立運動の闘士に射殺された。

日本政府は、朝鮮独立運動の彼等を不逞の徒と呼んだ。侵略者と被侵略者との立場の相違である。日本人の多くは、朝鮮人をスフ入りの人間と軽蔑して劣等人種視した。

○

台湾の霧社の住民達は、日本の搾取と抑圧に、たえられなくなり武器を持って立ち上った。それが台湾全島に広がり、日本に不満を持つ台湾人は、いろいろな形で抵抗した。ろくな武器も持たない台湾人が、日本の台湾征討軍をなやませた。

○

中国でも、日本の侵略に対して、相入れない立場の国民党と共産党は手を結んで、日本軍と戦ったことは、誰でも知る通り。

○

戦争に敗けた日本は、満州、朝鮮、台湾は勿論のこと、南洋諸島、北方領土もとりあげられた。戦争も、カケごとも負け方がはだかになる。だが勝った方も、特別大きな得はしていない。今までの戦争と違う点である。

○

アメリカの顔色に合せて、ソ連の脅威、北方領土を声高に云い出した人間達に、どれだけの覚悟と信念があるのか。北方領土をとりかえすためには、まず内敵である金や汚職で監獄行の政治家、官僚、軍需品の取引でリベートをたんまり取る黒幕、こんな腐敗分子がはびこる日本を、正常な日本にする必要がある。

○

敗戦で責任を感じ、自決した青年将校もいるが、兵士や国民に「生きて虜囚となるなかれ」と命令した、戦争の指導的立場に居た将軍達が、軍人恩給でぬくぬくとしている。これは、天皇の信任厚き武人のあるべき姿であろうか。このような状況では、北方領土解決の道は遠いようである。軍備増強と防衛産業の利潤追求行為のうたがいが強い。（1981・11・21）

▼正　誤▲

第一九号「敗戦直後の京都での人民闘争」（小柳津恒氏）の記事中

(3)頁一段九行目　維持法＝治維法

〃　三段十八行目　長三郎さん＝さん

〃　〃　(3)の二行目　熱辨＝熱辯

(4)頁一段五行目　多き＝大きかった。

〃　二段六行目　変った＝変わった。

〃　三段(6)の九行目　変った＝変わっ

(5)頁二段十九行目　推し＝押し

会員だより

○

いつも〝燎原〟誌、郵送有難うございます。このたび転居いたしましたので次号より下記住所宛お送り下さるようお願い致します。

これだけの出版物を定期刊行する御苦労、大変なものだと思いますが、どうか御奮闘下さい。遠方より応援しております。（〒六九〇松江市西川津町六八八の四鳥飼宿舎　野田公夫）

○

このたび夫幸次死去致しましたおりには、皆々様色々お世話になり有難うございました。

又、燎原第二〇号を沢山お届け下さいまして有難うございます。

この間の第二一回例会には出席致しませずほんとに失礼致しました。丁度十五日に納骨を致しまして、その翌日で親類の者が泊ったりしておりましたので品角さんからのお便りで、女どもが集まり食事をしながら、昔ばなし等をとのことでした。そして一時からの集りのことを詳しく知りませんでしたのでお断りしてしまいました。十六日朝頂いた「燎原」で例会を知り、せっかくの会でしたのに、出席致しませず、申訳なく残念に思っています。

今後、又出来れば例会にも出席させて頂きたく思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。（東山区今熊野宝蔵町　山田ユキ）

○

燎原ありがどうございました。

ところで、拙句「暁の鳴の一声孤独濃し」（紅花女）とときとルビーを、うって下さいましたが、あれは鳴で、鴫ではありませぬ。もずは一般には、百舌とかきますが、句の世界では鵙を用います。石段を「磴」とかいたり、鳥は鴉と一般に句人は用います。

わざわざルビーをうっていただいて私が書いたと思われては少々迷惑いたしますので、一言。

十一月十六日は宇治納所各界連絡会の事務所開きと重なり失礼いたしました。（淀大下津　渡辺紅花女）

○

〝東海道気まま旅〟を計画、その旅立ちに際しまして格別の御高慮を賜わりほんとに有りがとう存じました。

途中　二四号台風に逢い乍らも、計画通り旅程を進め、貴重な体験と新らしい見方を拡げ、老生有縁の喜びと感じております。

予定通り旅程を完了し、無事帰省致しました。

右、御支援の御礼と共に帰着の御挨拶まで……（一九八一、十、十）（伏見区深草西浦町六ー五九　しののめ荘　伊達義三郎）

○

新読者、北区雲ケ畑中津川町一九〇安井昭夫あて、№十九号から送ってあげて下さい。

なお創刊号からバックナンバーをそろえたいので、お手もとにございましたら送って下さい。同時に代金もお知らせ願います。（中京区富小路二条上る京都林務事務所内　白石秀知）

○

先月は松山事件の現調と重なってしまい、例会を欠席、山田さんにも欠礼申し訳なく、また残年に思いました。

今月は余り例のない会で、きっと面白いいい会になるだろうと楽しんでいたのですが、神経痛が悪化して歩けなくなり失礼しました。自分の身体なのに自由にならないので、腹がたちます。

振替用紙が同封されていたので会費を送ります。これは来年の分でしょうね、よろしくお願いします。お体をお大事に！（左京区高野玉岡町一　大原健次）

事務局だより
領収証に代えて

会費、誌代、カンパなど左記の各位から頂戴いたしました。御礼申上げます。（順不同、敬称略）

二、〇〇〇円　堀川労働者学習会
二、〇〇〇円　池田　忠夫（枚方）
二、〇〇〇円　市川　聡（右京）
一、〇〇〇円　西山　卯三（左京）
二、〇〇〇円　長岡　栄夫（右京）
二、〇〇〇円　高橋　恒雄（右京）
二、〇〇〇円　吉村　克之（伏見）
二、〇〇〇円　谷口　泰夫（日吉）
四、〇〇〇円　浦山　倫郎（大阪）
二、〇〇〇円　岩崎彰之助（左京）
二、〇〇〇円　安井　昭夫（北区）
五、〇〇〇円　山中　登（宇治）
二、〇〇〇円　中井　和夫（園部）
二、〇〇〇円　君和田和一（山科）
四、〇〇〇円　故山田氏扱
七、〇〇〇円　清水武彦（市役所）
二、〇〇〇円　藤井　和雄（宇治）
二、〇〇〇円　東山民主商工会
二、〇〇〇円　青木幸次郎（南区）
三、〇〇〇円　大原　健次（左京）
三、〇〇〇円　寿岳　章子（向日）
五、〇〇〇円　杉山　茂（宇治）
三、〇〇〇円　松山　広治（西宮）
三、〇〇〇円　浅川　亨（東山）
三、〇〇〇円　西村　清三（伏見）
一、〇〇〇円　児玉　誠（中京）
三、〇〇〇円　竹永　三男（松江）
二、〇〇〇円　松本　春美（熊野）
二、四〇〇円　福田力之助（東京）
二、〇〇〇円　末広　勝司（北区）
三、〇〇〇円　平林　清（東京）
三、〇〇〇円　重本　健治（吹田）
五、〇〇〇円　南法律事務所（伏見）
二、〇〇〇円　長島　三郎（伏見）
三、〇〇〇円　細迫　朝夫（北区）
五、〇〇〇円　大島久次（市職組）
二、〇〇〇円　手塚　亮（岡山）
二、〇〇〇円　小松　とき（神戸）
二、〇〇〇円　江口　常平（調布）
（以下次号）

△お　願　い▽

本「京都の民主運動史を語る会」の会費は、年額三〇〇〇円で〝燎原〟の誌代（二〇〇〇円）が含まれています。

なお本年度総会で、会期を一月一日から十二月末までと改めましたので、本年度会費、又は誌代未納の方は年末までにお払込みを願います。

前号に振替払込用紙を同封したのは本年（一九八一）度の未納会費、同誌代の御払込みと、年賀名刺広告費のお払込みにご利用頂きたい……

よろしくお願いします。　（K）